

安心報道

——大震災と神戸児童殺傷事件をめぐるつて

林英夫

Hayashi Hideo



集英社新書

0014

B

林 英夫 (はやし ひでお)

一九四九年大阪府生まれ。神戸・サンテレビの報道制作局勤務、アナウンス・チーフ。日本マスコミ学会会員。関西学院大学社会学部卒業後、サンテレビに入社。八五年から兵庫県を中心に放送される夕方の報道番組「ニュースEyeランド」のキャスターに。九年からは「ニュースEyeランドf(フォルテ)」も加わり、二つの報道番組のキャスターを担当。阪神淡路大震災、須磨における連続児童殺傷事件の報道にあたる。

安心報道

二〇〇〇年一月二三日 第一刷発行

集英社新書〇〇一四B

著者……………林 英夫

発行者……………小島民雄

発行所……………株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇 郵便番号一〇一八〇五〇

電話 〇三―三三三三〇―六三九一(編集部)

〇三―三三三三〇―六三九三(販売部)

〇三―三三三三〇―六〇八〇(制作部)

装幀……………原 研哉

印刷所……………凸版印刷株式会社

製本所……………加藤製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©Hayashi Hideo 2000

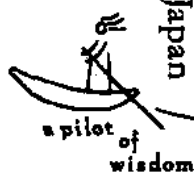
ISBN 4-08-720014-0 C0236

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

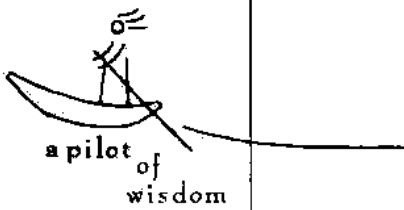
Printed in Japan



安心報道

江苏工业学院图书馆
藏书章

林英夫
Hayashi Hideo



目 次

プロローグ

◎第一章……

大震災発生……全国・世界に発信

19

一 初期報道が残した課題

二 「見せ物」になった被災地

三 震災報道における「温度差」

◎第二章……

被災者のための放送を

55

一 東京と被災地のあいだで

二 被災した地元局

三 被災者のための震災報道

◎第三章……

「安心報道」と「心の救援」

- 一 サンテレビは何を伝えたか
- 二 再生・復興へむけた「安心報道」
- 三 「心の救援」と「危機介入」

79

◎第四章……

神戸・連続児童殺傷事件

- 一 メディアが拡大した「劇場型犯罪」
- 二 「劇場型犯罪」と「安心報道」
- 三 犯罪報道の構造的課題
- 四 ジャーナリズムの倫理と人間主義の精神

141

◎第五章……

市民のためのメディアに

- 一 メディア・リテラシー

207

二 市民による市民のためのメディア

エピソード

プロローグ

悪夢の地鳴り

一九九五年一月一七日午前五時四六分――。

ゴーという地鳴りとともに、下から突き上げられるような強烈な縦揺れ。一体何が起きたのか。夢でも見ているのか。マンション中に鳴り響く非常ベルの音で、意識が現実のものになった。途端になすすべもなく、頭から蒲団をかぶって揺れがおさまるのを待った。

家族の安否を確認するため寝室から出たが、家財道具が散乱して足の踏み場もない。懐中電灯をさがして部屋を照らしてみると、自分の目を疑うような状態だった。

冷蔵庫は倒れて食器棚にもたれかかり、テレビはリビングの床に転がっている。本棚も棚ごと本が飛びだしている。あの重いピアノが五〇センチは移動していた。自室の熱帯魚鉢が倒れて、長男が足に軽い打撲を負った以外は家族全員無事だった。

ようやく携帯ラジオをみつけて聴いてみたが、大阪や京都の震度を伝えている程度で、震源地がどこなのかもわからない。窓から恐る恐る外を見ると、隣家の塀が倒れているのが目に飛びこんできた。

私が住んでいるのは神戸でも最も被害が大きかった東灘区である。この時点で、六〇〇〇人を超える犠牲者が出る大震災であることを知る由もなかった。

暗闇のなかで電話が鳴った。後輩アナウンサーからだった。彼は会社から徒歩で数分のポトアイランドに住んでいる。とにかく安全を確認して会社に入ってくれと頼んだ。私も報道部や同僚アナに電話を入れるが、いっこうにつながらない。

ふと窓の外を見ると、芦屋方面から火の手が上がっている。これはえらいことになってきた。以前番組で放送したことのある兵庫県西部の「山崎断層」が動いたのであろうか。まだラジオは詳しいことは伝えてくれない。

取材の必要性を感じて外へ出てみた。国道二号線ちかくまで行くと、いつもの街並みは消えてしまっていた。

毛布をかぶって黙々と避難して行く人の列があった。

それにしても静かだ。鉄筋コンクリートの五階建てマンションが傾いている。信じられない。ガスの臭いが漂っている。危険を感じながら、コンビニ前の公衆電話から報道部に電話を入れる。何回かけてもつながらない。ひょっとしたら、大きな被害を受けているのかもしれない。こんな心配をしているうちにも何度も余震が続く。思わずしゃがみこんでしまうような大きな余震もあった。

急に一人暮らしの父のことが心配になってきた。車で数分のところだ。ガレージから車を出して、思い切って車で行ってみた。もう午前七時ごろになっていただろうか。

カーラジオを聴くと、震源地は淡路島、マグニチュード7・2と伝えていた。ようやく大変な地震であることが理性でわかった。昭和三〇年代に建てられた実家は全壊状態だった。呆然とした。父は大丈夫なのか。幸いケガもなく無事だったが、ひとつ隣の部屋で寝ていたらタンスの下敷きになって即死状態だったかもしれない。とにかく私のマンションに避難させ、そのまま出勤することにした。

仕事か救助か

夜明けとともに国道は大混雑し始めていた。もちろん信号は消えたまま。しかし、クラクシヨンひとつ鳴らす車もなく互いに譲りあって整然と徐行している。

西にすすむにつれ渋滞が始まった。車で出たことを悔んだが、引きかえすわけにもいかない。裏道に入ったりしながらすすむが、道路に亀裂が入っていたり、段差ができていたりで右往左往だ。道路に家が倒れてきて通行できないところもあった。

「生き埋めになつとるんやあ」

大声をあげて走り去る人がいた。いま自分は何をすべきなのか。会社へ行って、たとえ放送ができたとしても、きつとテレビなど見ている人はいないはずだ。このまま車を停めて、救助の手伝いをすべきなのではないか。自問自答を繰り返しながら、また別の道をさがした。

カーラジオからは死者の数や、鉄道ストップのニュースが伝えられている。ポートアイランドにつながる神戸大橋が大きな被害を受け、通行不能だという。途中、公衆電話の長い列に並んで会社に電話するが、まったく通じない。テレホンカードや百円硬貨は使えないので、電話が終わった人は次の人に余った十円硬貨をリレー式に手渡していく。

神戸大橋の手前に到着したのは一〇時半ごろだった。普段なら三〇分あまりで行けるところが、二時間以上かかっている。しかしそこには警察の装甲車がバリケードをつくって島へ入れないようにしている。

警察官に聞いてみたが、「通れません」の一点張り。あとで同僚記者に聞いた話だが、彼は「病院のドクターだ」と言っていて突破したらしい。先ほどのラジオ情報に縛られて、私は橋が落ちていっているものと思いきや、市役所へ行く道路も閉鎖されている。以前、中央市民病院があつて岩盤が強い新神戸駅前のホテルなら大きな被害もなく、会社への電話連絡も可能かもしれない。遠回りしてなんとかたどりついた。

しかしここでも電話がかからない。不安そうな客がロビーに座りこんでいる。

宿泊客にケガ人はなかったが、新幹線がストップしているので待機してもらっているということだった。東京から来たという客は、「信じられない」「家にも、会社にも連絡が取れない」と不安げな表情をみせた。そのうち電気が通じたのか、ロビーにテレビが設置され人垣ができ

た。ここで初めて被災地のヘリ映像を見ることになった。正午のNHKニュースだった。

衝撃的なテレビ映像

阪神高速が倒れて、橋げたが落ちている。神戸港の岸壁が崩れて、車が水中に転落している。街のあちこちで火の手が上がっている。地獄絵を見せつけられているような気がした。

私は大学時代からナショナルメディアとローカルメディアの比較研究をテーマにし、うんぜんふ雲仙普賢岳げんだい噴火災害の報道のあり方などについても関心を寄せてきた。このテレビ映像を見て、また大変な報道合戦になるのではないかという予感とともに、余震や火災による取材陣の二次災害の危惧を抱いた。一方で私の所属する神戸の地域局、サンテレビはどんな放送をしているのか大変気がかりだったが、テレビを食い入るように見ている人たちにチャンネルを変えさせてくださいと言う勇氣もなく、また会社に向かおうと神戸大橋まで車を走らせた。

神戸の中心街・三宮はまるでゴーストタウンのように変わり果てた姿になっていた。

大きく傾いたビル、一階が完全に押しつぶされているビル、三、四階あたりが押しつぶされているビル。電線が無数にたれ下がって、道路にはガラスの破片が散乱している。事務用デスクが窓から飛びだしそうになっているビルもあった。

再び国道へ出ようとすると、一台の車が立ち往生していた。道路に段差ができて、前にすす

めない。人工透析のため母親を病院に連れていく途中だという。後続の車の運転手とともに、石や木をさがした。気がつくど、誰かがブロックの破片を積み上げていた。さらに石を置いて、ようやく一台ずつ通れるようになった。最初の車には無事病院に着いてほしいと祈るのみだった。

私も、一刻も早く会社に入りたい。そんな気持ちで神戸大橋の手前まで到着。さらに警察車両の数が増えていた。やっぱり「通れません」のひとこと。大橋がどうなっているかも説明してくれない。その警察官の事務的な態度に、急に私は冷静になった。

へテレビ映像で見た衝撃的な街の姿をすっかり自分の目で見ておこう。そんな気持ちになって、いま来た道を引きかえすことにした。

被災者の「不安」と「心の傷」

「大丈夫だった……」

「なんとか命だけは……」

「家は……」

「一階がぺっしやんこ……」

避難所になっている御影^{みかげ}公会堂の前で中年の女性がポリバケツを持った女性に声をかけてい

た。

この公会堂は野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』^{ほた}に出てくる。公会堂は空襲をまぬがれ、今回の震災にも耐えた。避難している人々の姿を見て、神戸大空襲で妹を背負って逃げまどう清太のことをふと思い出してしまった。

ただ呆然と座りこんでいる人。頭に包帯を巻いて横になっている人。肩から毛布をかけてパンをかじっている人。水や食料のことを話しあっている人々……。それぞれから不安と恐怖の表情がうかがえた。

人に話を聞くのが仕事なのに、声をかける気持ちにならない。みんなが難儀している時に、何を聞けばよいのかも浮かんでこない。朝から被災地の惨状を目の当たりにして、私はすっかり滅入ってしまった。

神戸市中央区で被災した神戸大学医学部の精神科医・安克昌氏^{あんかつまさ}は『1995年1月・神戸』（中井久夫編、みすず書房、一九九五年）の「被災地のカルテ」のなかで、被災者の「心の傷」について次のように指摘している。

「阪神大震災は、さまざまな心の傷（心的外傷）を被災者に与えた。大地が揺れるという恐怖体験も、一つの心的外傷体験である」

安医師は自らも涙もろくなり、「神経がたかぶり混乱した気分だった」と告白している。

被災者の「不安」と「心の傷」についてはアメリカやオーストラリアなどで臨床研究がすすんでいる。

「まぬがれえない恐怖感、自分や家族の生命への脅威、住居や住環境の喪失などは、すべて災害時に人間が対処しなければならぬ問題である」

オーストラリアの精神医学者、ビヴァリー・ラファエル氏は『災害と心の救援』（L・S・オースティン編、石丸正訳、岩崎学術出版社、一九九六年）で災害時の多様な心的外傷を指摘し、「温かい共感と人間的な連帯感」でケアにあたる必要性を強調している。

メディアの役割と「安心報道」

兵庫県のまともによると、阪神淡路大震災による死者は関連死を含めて六四三〇人（一九九九年九月現在）、家屋の倒壊は四五万世帯を超えた。テレビはもちろん、まだラジオもなかったころの関東大震災当時比べて、圧倒的な「情報化社会」のなかで起きた大災害でもあった。大震災の衝撃的な映像はテレビメディアを通じて内外に発信された。

これによって国内からは多くの救援物資や義援金、ボランティアが被災地に集まり、海外からも多くの救助、救援の手がさしのべられた。ほぼリアルタイムで震災の惨状を知らせ、被災地支援を広げた点でメディアの果たした役割は大きかった。